

史跡難波宮跡発掘調査(NW03－8次)現地説明会資料

平成16年3月7日(日)
大阪市教育委員会
財団法人 大阪市文化財協会

はじめに

難波宮跡公園を中心とする一帯では、1954年から始まった発掘調査によって、大きく分けて2時期の宮殿跡(前期・後期)が見つかっています。前期難波宮は建物が掘立柱で瓦を葺かず、全面に火災の跡があり、天武天皇の朱鳥元(686)年に火事があった難波宮と考えられています。それに対して後期難波宮は、聖武天皇の時代の天平16(744)年に一時首都ともなった難波宮で、礎石の上に柱を建てて瓦を葺いた建物であったと考えられています。前期・後期ともに建物配置は中軸線を挟んで左右対称となっており、2時期の宮殿跡がほぼ同じ場所に建てられていたことが大きな特徴です。

今回の調査は公園の南端部分で行っています。ここは後期難波宮の朝堂院ちょうどういんがあった場所です。朝堂院は官人達が集まっていろいろな儀式や饗宴きやうえん、政務などを行ったとされるところで、中央に広い庭があり、それを取り囲むようにして建物(朝堂)が建っています。朝堂の数は宮殿によって違いがあり、前期難波宮では見つかったもので14堂、藤原宮や平城宮では12堂、長岡宮(註1)では8堂です。後期難波宮の朝堂はこれまでの調査で長岡宮と同じ8堂であることがわかっており、出土する瓦その他から後期難波宮の建物が移築されたものと考えられています。

今回の調査地点は朝堂院の東・西第4堂が中軸線を挟んで向かい合う場所です。東調査区は東第4堂の西辺部分、西調査区は西第4堂の南東角部分にあたります。東第4堂については1986年度の調査(NW86-28次)で南辺の階段部分などが一部確認されています。西第4堂は1995年度に調査(NW95-14次)が行われましたが、明確な基壇跡を見つけることができませんでした。すなわち東・西第4堂については、建物や基壇全体の大きさ、階段の位置など、いまだ不明な点が多々あるというのが現状です。

調査成果

後期難波宮朝堂院東第4堂(東調査区)

東・西第4堂は朝堂院内の建物では最も南に位置し、他の朝堂がすべて南北方向の建物であるのに対し、東西方向の建物と考えられています。東第4堂では1986年に南辺の一部で階段の跡などを発見しましたが、今回の調査ではそれに連続すると思われる基壇南辺の一部と西辺の一部で基壇の地覆石じふくいし(註2)を抜き取ったと思われる跡が見つかりました。南辺・西辺ともに抜き取り跡は溝状になっています。南辺での幅は約0.5m、深さは約0.1mで、長さ1.5m分が見つかりました。抜き取り跡の中には後期難波宮に使われた瓦とともに凝灰岩ぎようかいがん(註3)の破片が多く混じっています。ここから第4堂の基壇装飾に凝灰岩が使われたことが推測されます。西辺は後世の攪乱かくらんで残りがよくなかったのですが、幅は最低で0.5m、深さは0.1mと南辺とほぼ同じ規模です。北辺は近代のコンクリート基礎によって破壊されており不明ですが、今回南辺・西辺が確認されたことで、東第4堂の南西端の位置が判明しました。

また、東第4堂基壇の断面を観察すると、基壇をつくる工程を伺うことができました。作業

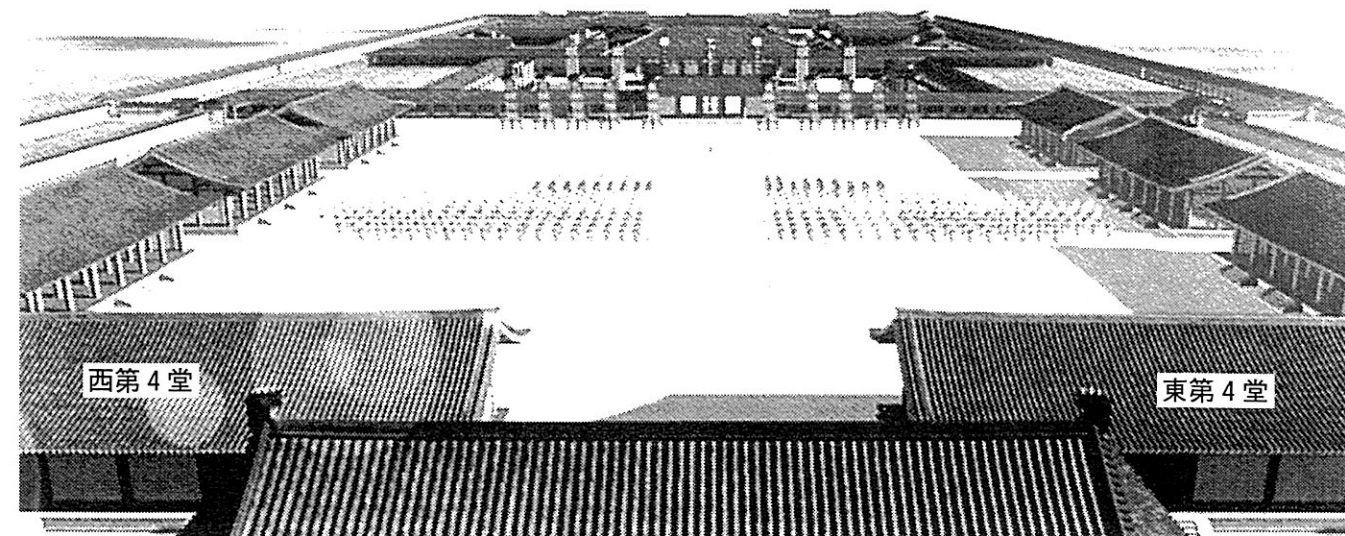


図1 後期難波宮朝堂院想像復元図(南から)

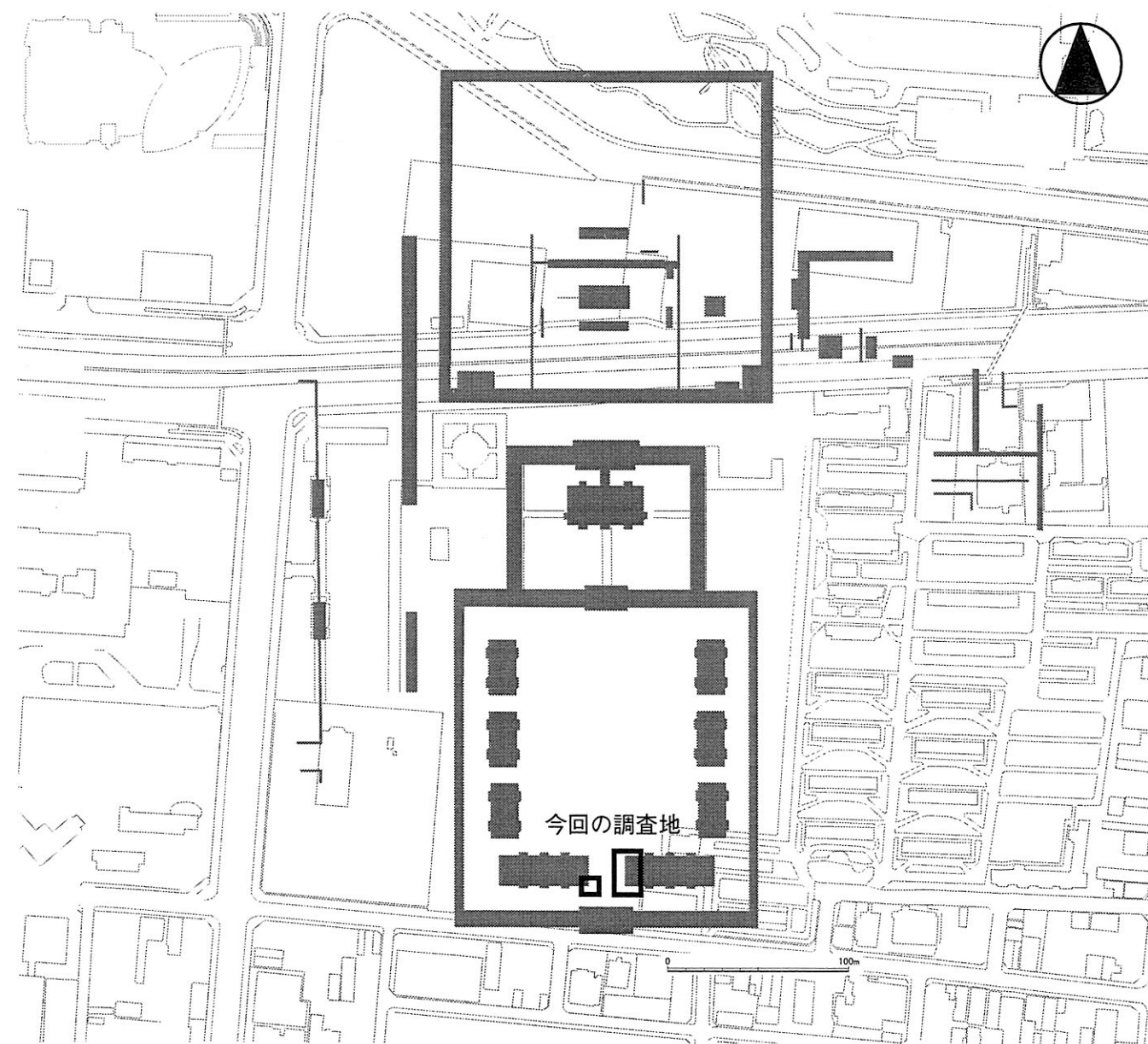


図2 調査地位置図

手順は以下のように復元されます。

1. まず、基壇の部分を残して、その周囲を掘り下げる。
2. 残した部分の周囲に盛土をして整える。
3. 周囲に細い溝1を掘る(この溝1は短時間で埋められたようです)。
4. 地覆石を据えたり、盛土をしたりして、さらに整え基壇を完成させる。
(盛土を先に行ったか、地覆石を先に据えたかは不明)
5. 最終的には(移築のために)地覆石が抜き取られる。

基壇外周に掘られた溝1が何に用いられたのかはわかりませんが、ある程度基壇を整えた後に掘られていること、埋まった土に後期難波宮の瓦が混じること、埋まった後にさらに整地がなされていることなどから、建物造営に關係する溝と思われます。溝1は底の部分で幅約0.2m、深さ約0.35mです。西辺では基壇端から2mほど離れており、南辺では3mほど離れています。また溝1の上部には溝2があります。溝2は南北溝で基壇西辺と平行しています。基壇南辺までは続かず、途中で途切れます。幅約0.75m、深さ約0.45m、長さ約6m分が見つかりました。溝を埋める土には難波宮の瓦とともに凝灰岩の大きな破片が混じっており、東第4堂を解体するとき埋まったものと思われます。基壇西辺との關係から雨落溝(註4)の可能性も考えられますが、そうすると途中で途切れることや基壇との距離が問題となります。

なお、このほかにも東調査区では古代の溝や柱穴が見つっています。溝3は調査区西部で見つかった南北溝で、ほぼ正方位を向きます。幅約1m、深さ約0.15mで、長さ約13m分が見つかりました。溝の埋め土には後期難波宮で使われた重圈文軒平瓦が入っており、建物解体時に埋まったものと思われます。用途はわかりません。柱列1は基壇西側にあり、ほぼ正南北方向を向きます。柱穴の大きさは0.7m×0.6mほど、柱の跡は0.3~0.4mです。柱間寸法にばらつきがあり、南から2.2、3.1、2.9mです。後期難波宮の時期のものである可能性があります。また一面には難波宮造営以前の柱穴が多数見つっています。

後期難波宮朝堂院東第4堂(西調査区)

西調査区は東調査区に比べて残りが悪く、基壇築造に関する盛土などは確認できませんでしたが、ここでも地覆石を抜き取ったと思われる跡を検出しました。抜き取り跡は溝状になっており、東調査区とほぼ等しいといえます。幅約0.55m、深さ約0.15mで、約90度に折れ曲がっています。南辺・東辺の位置は、難波宮の中軸線を挟んでそれぞれ東第4堂の南辺・西辺とほぼ左右対称の位置にあります。このことからこの部分が西第4堂基壇の東南隅であることが推測されます。南東隅から西北側(基壇内側)が高いのに比べてその外側は低く、ここでも基壇部分を残して周囲を掘り下げて基壇を造った可能性が考えられます。

まとめ

今回の調査では東・西それぞれの調査区において、後期難波宮朝堂院東・西第4堂の基壇跡を検出することができました。その結果、建物全体の規模は分からないものの、位置を明らかにすることができました。第4堂の位置は中軸線を中心にはほぼ左右対称にそれぞれ14.1m、14.5mずつ離れており、東・西第4堂間は約28.6m(96尺か)となります。また東第4堂では1986年の調査で階段跡が見つっていることから、その階段位置と基壇端の位置などから、これまで長岡宮で検出されている西第4堂とほぼ同じ規模と考えることができます。ここから第4堂も

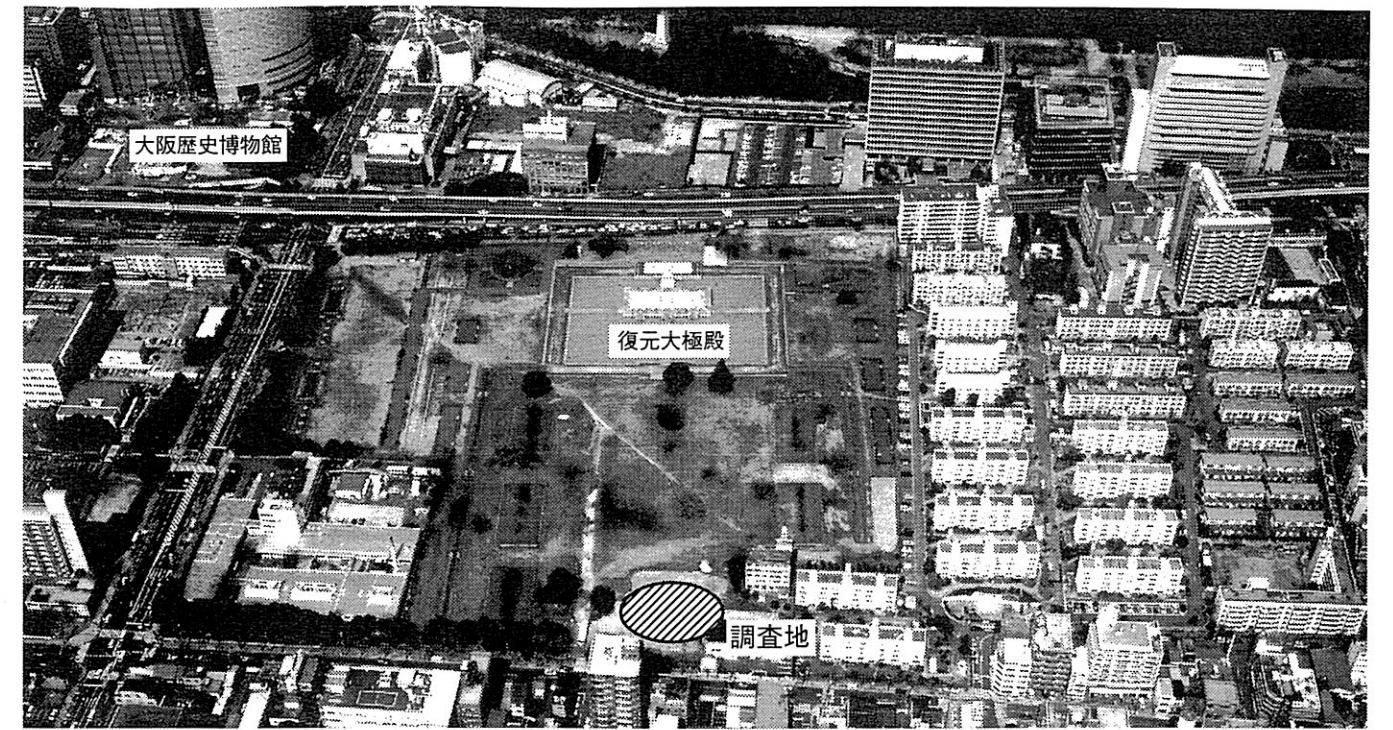


図3 難波宮公園と調査地を南から望む

長岡宮に運ばれた可能性が高いと思われます。

東調査区では基壇南辺の抜き取り跡を良好に検出することができました。抜き取り跡の幅は約0.5mであり、これはそこに据わっていた地覆石の最大の大きさを示します。後期難波宮の大極殿で見つかった基壇の地覆石は幅約0.6mで、これに比べると、ふた回りほど小さいものが使われたようです。また大極殿基壇と同様、ここでも延石(註5)の跡が見られず、地覆石を直接地面に据えていたようです。基壇のつくり方に関しても大極殿基壇と同様、基壇部分を残したまま周囲を掘り下げてつくっていた可能性が考えられました。最後に、基壇の周囲に掘られた溝1は建物の造営に關係した可能性が高いと思われますが、基壇西辺・南辺からそれぞれ2m・3mと異なった距離にあります。あくまで推測ですが、これが建物の上部構造に關係していたとすると、第4堂の屋根は切妻造りであった可能性が考えられます。

このように、今回の調査では多くの成果を得ることができました。特に基壇の位置を明らかにできたことは大きな成果といえます。ただ、残念ながら第4堂の正確な基壇の大きさや礎石の位置などを知ることはできませんでした。今後の調査で明らかにしていきたいと思ひます。

註

- 1)長岡宮…現在の京都府向日市に所在する。桓武天皇によって延暦3(784)年に遷都され、10年後の平安遷都まで都がおかれた。
- 2)地覆石…古代の基壇化粧で下に置かれる細長い石。図5参照。
- 3)凝灰岩…堆積岩の一つ。強度は低い加工がしやすく、古代建築の基壇や礎石などに用いられた。
- 4)雨落溝…軒先から落ちる雨垂れを受けるために建物周囲につくられた溝。
- 5)延石…地覆石のさらに下に置かれる石。図5参照。

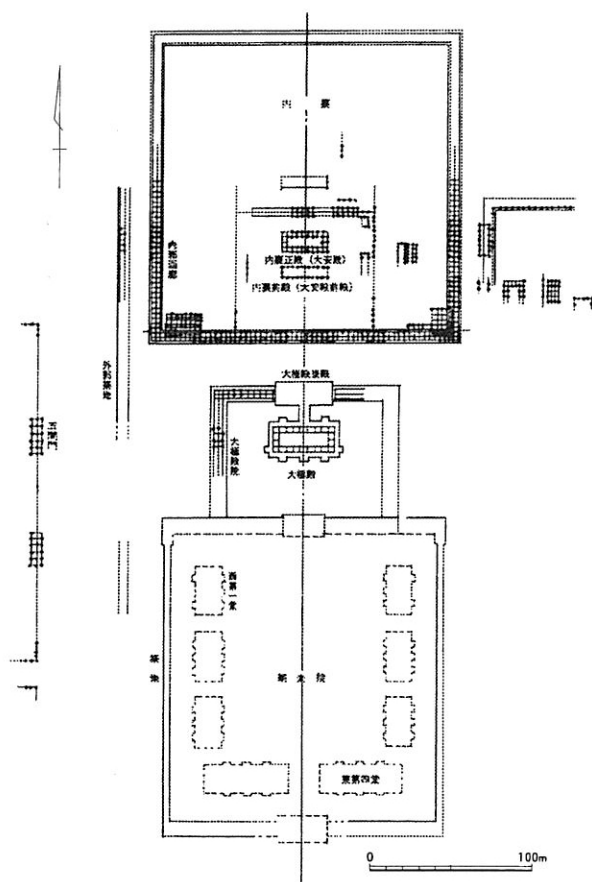
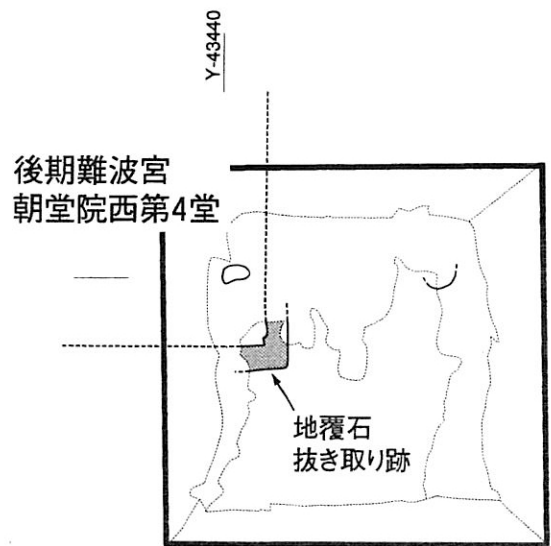


図4 後期難波宮殿舎配置図



<西調査区>

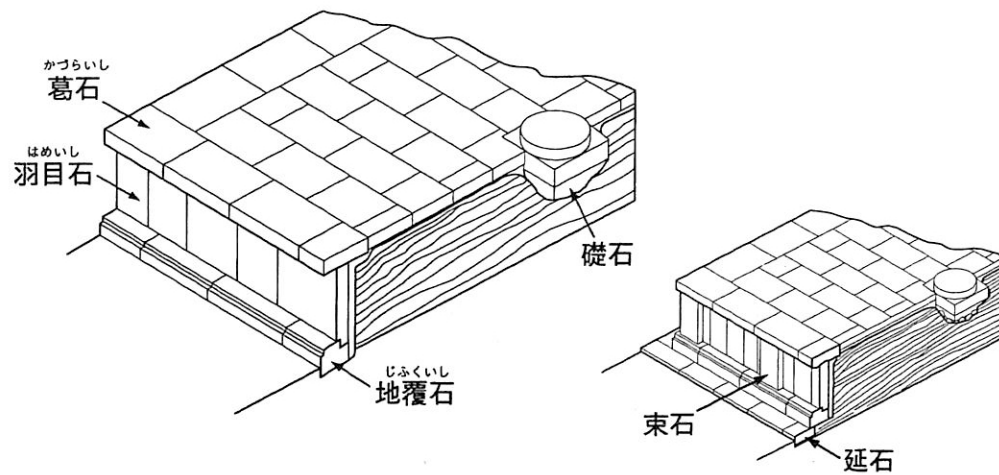
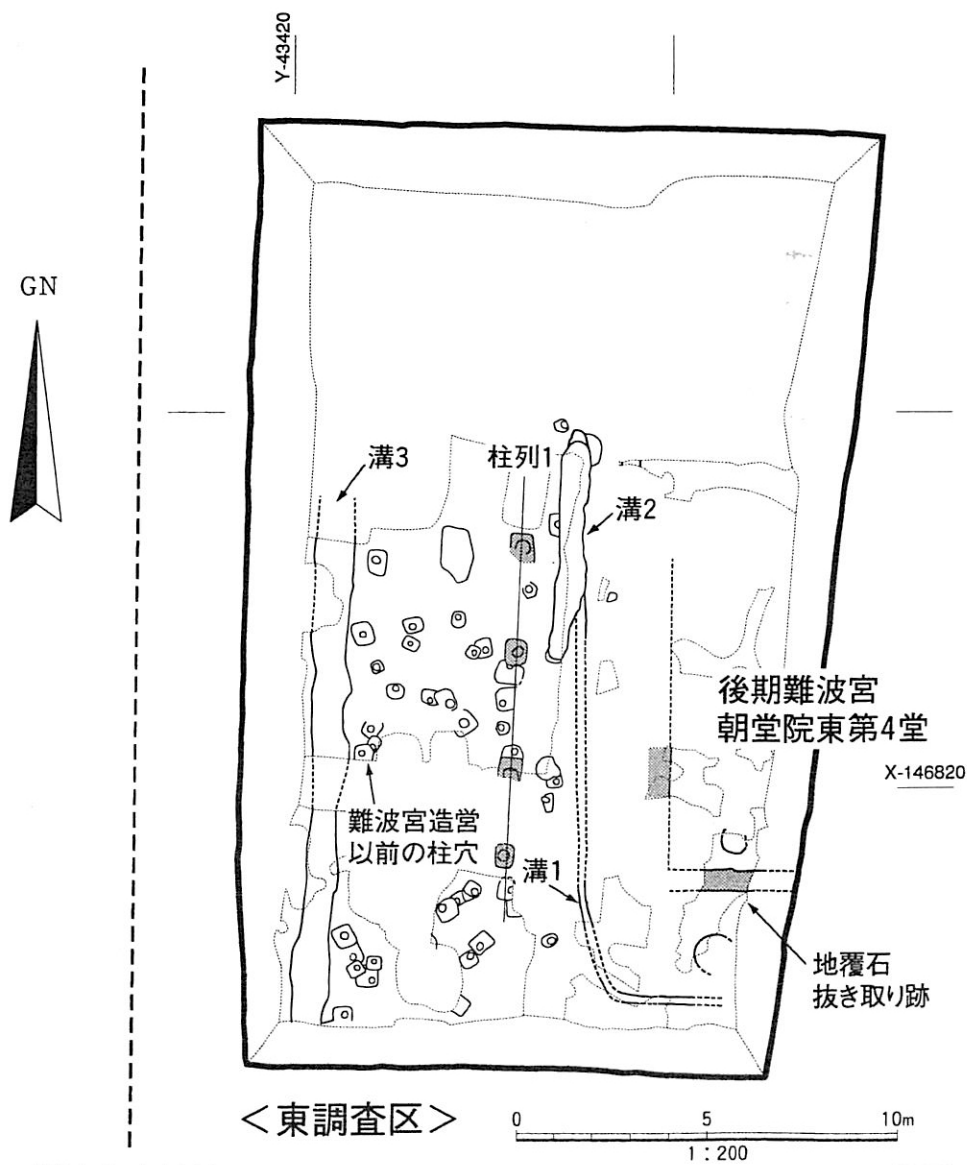


図5 壇上積基壇(束石なし)模式図(右は束石、延石ありのもの)



難波宮中軸線

図6 遺構配置図

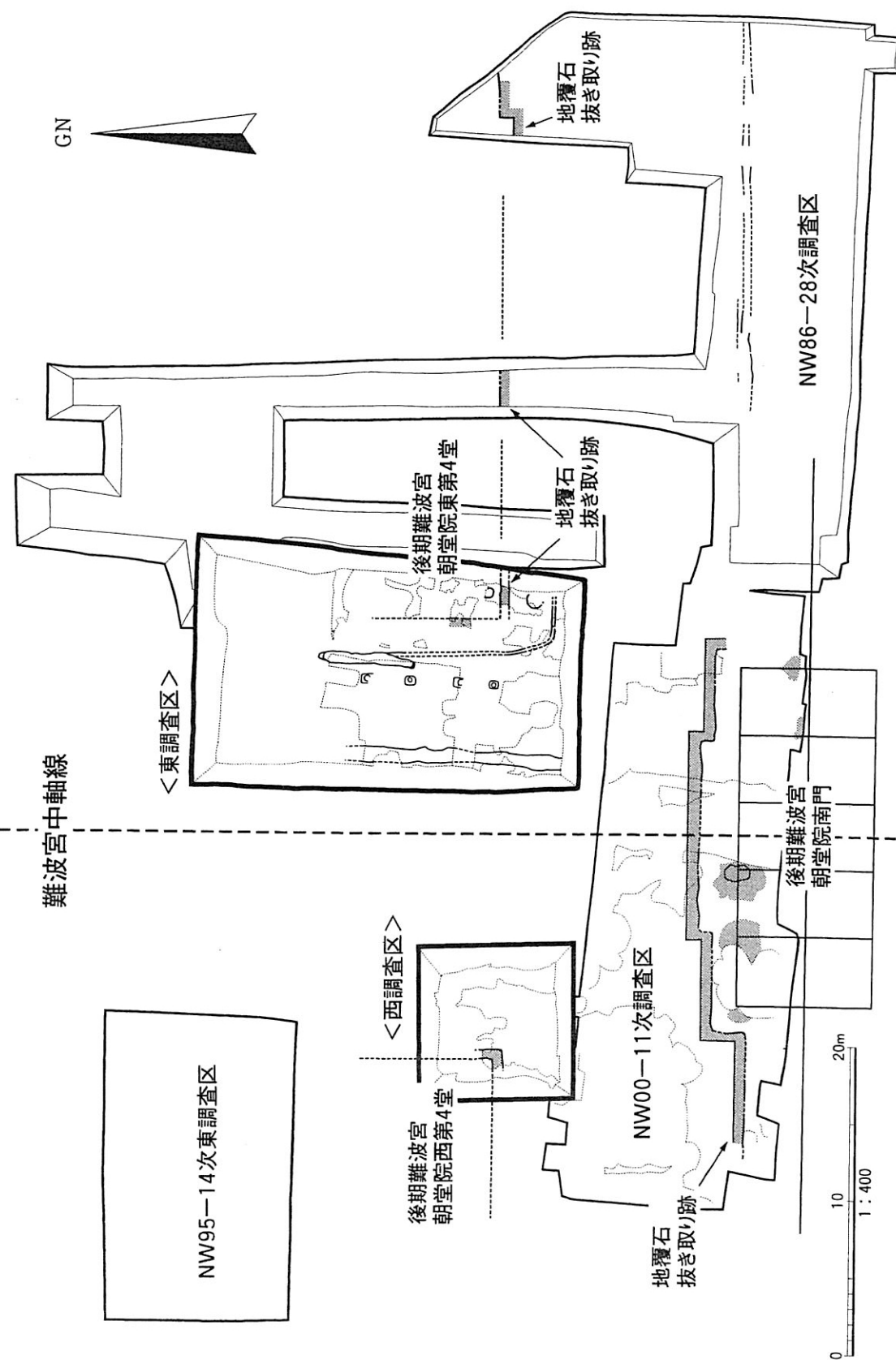


図7 今回の調査地と周辺における後期難波宮の調査